

「地理的見方・考え方 —— 地域事象の教材化 —— 」*

文部科学省 教科書調査官

松井 秀郎

目 次

はじめに

高等学校地理の新学習指導要領と「地域調査」

ふたつの「二」から発想する

1．加納高校周辺地域の「二」

1) 岐阜市における文房具関連の店舗を地域事象とした教材化

2) 岐阜市・大垣市・高山市の文房具関連の店舗分布から考える

2．細畑の「二」

小学校からなされている「地域調査」とその段階的継続

1．小学校・中学校での地域調査に関わる学習指導要領と教科書記述

2．高等学校での教科書記述と教科書の性格

3．「地域調査」の継続性と地理的技能や地理的な視点や方法の定着

「地域調査」における地理的な見方や考え方

1．地域の顔・骨組み・土地柄

2．「地域調査」での観察の基本

3．地理的な見方や考え方の基本

「地域調査」から地域像を紡ぎ出す

1．大学での野外実習の事例と高校での「地域調査」への援用

1) 三重県上野市の事例

2) 山口県萩市の事例

2．加納高校周辺地域の地域像

3．岐阜市東郊の中山道周辺地域の地域像

4．四つ角の看板からみた不思議

足下から広げる地理的認識

おわりに

【謝辞】

【注】

【参考文献】

【配付資料 No.1 , No.2 , No.3 , No.4】

【プレゼンテーション資料 No.1 , No.2 , No.3】

(本文に関連の強いもののみを掲載した。全容はCD-Rを参照されたい。)

はじめに

平成10年の学習指導要領の改訂を受けて、高等学校で用いられる地理の教科用図書（教科書）の検定も終わり、平成16年度からは新学習指導要領に準拠した教科書が全て出揃い、学校現場での利用に供されることとなった。今次の学習指導要領の改訂の主眼は、まさに「学び方を学ぶ学習」を重視するというにあり、地理の学習指導要領でもこれに沿って、地理的スキルや地理的な見方・考え方を習得させることや、資料の収集・分析を通して地域性を追究したり、世界的視野から空間的広がりにも留意して大観したり、作業的・体験的学習を重視することなどが求められている。

しかしながら、これまでの地域記述型を主とする教科内容から、地理的知識やスキルなどをこのような「学び方を学ぶ学習」を通して生徒に習得させていくことへの転換は、中学校での状況を側面からみれば高等学校でも容易なことではないと推測される。殊に地理での作業的・体験的学習の重要部分となる地域調査においては、教員側の相当の準備に支えられてでなくては成り立ち得ない。本稿の元になった講演をお引き受けするに当たり、当初には高等学校で地理を授業されている教員の方々にもどのようなお話しができるのかが疑問であった。

ところが、先生方から実情をお聞きする内に、これは何かお役に立てることがあるかもしれないと考え直した。それは夏に岐阜市に下見に出掛けた際に、「うちの高校の周りには教科書にあるような特徴的な所がないから地域調査の授業は難しい」というようなお話をうかがったからである。実際に、教科書に取り上げられている地域には、他の地域には見られない特徴的な地域性を持つところが選ばれており、このほか教員の方々の体験してきた大学の野外実習や教員向けの地理学会の巡検でも、顕著な特徴の見られる地域を対象として効率よくルートが設定されている場合が多い。こうしたことから、「地域調査」にはどこか特徴的な地域性が見られる所へ出掛けるものという概念を抱かれる先生方が多いのではなかろうか。しかしながら、わざわざ遠くに出掛けなくとも学校の周辺地域や地元地域で、十分に地域調査の学習効果を上げることができるのである。本稿ではこのような点に重点をおいて、お話しさせていただいた内容を整理したものである。

高等学校地理の新学習指導要領と「地域調査」

教育課程審議会の答申では、地理A改訂の要点は、「地図の読図・描図や地域調査など、作業的、体験的な学習の一層の充実を図るとともに、現代世界の諸課題を歴史的背景に留意しつつ地域性を踏まえて追究できるようにする」としている。地理Aは、(1)「現代世界の特色と地理的スキル」、(2)「地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題」の2つの大項目で構成されている。中でも大項目(1)「現代世界の特色と地理的スキル」では、「ウ」多様性を増す人間行動と現代世界」の内容の取扱いで「ウについては、身近な情報を地理情報として活用するスキルが身に付くよう工夫すること。」としており、また「エ」身近な地域の国際化の進展」では「生活圏、行動圏に見られる世界と結び付く諸事象の地域調査やその結果の地図化などを通して、」と、内容として地域調査を取り上げることが求め、さらにこの内容の取扱いでは「エについては、生徒の特性や学校所在地の事情等を考慮し、地域調査を実施し、その方法が身に付くよう工夫すること。」としている（配布資料No.1）。

同様に地理B改訂の要点を見ると、「地理的な見方や考え方の指導を一層重視し、現代世界の地理的認識と関連付けて体系的に学ぶことができるようにする」としている。地理Bの目標に示されている、「現代世界の地理的事象を系統地理的、地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い」とは、地理Bが世界の地理的事象を主な対象として現代世界の地理的認識を目指していることを示している。指導要領では「地理的事象」を「現代世界に生起している諸事象を位置や空間的な広がりとのかわりごとくとらえた事象」と規定している。さらに、「地理的な見方」については「日本や世界に見られる諸事象を位置や空間的な広がりとのかわりごとく地理的事象として見いだすこと」であり、「地理的な考え方」については「それらの事象を地域という枠組みの

中で考察することである」としている。

地理Bは、(1)現代世界の系統地理的考察、(2)現代世界の地誌的考察、(3)現代世界の諸課題の地理的考察の3つの大項目で構成されている。この中で、(2)では市町村、国家、州・大陸の3つの規模の地域を取り上げ、それぞれ「地域の規模に応じて取り上げる視点や方法などが異なってくることに留意して取扱いを工夫する」こと、市町村規模の地域では「学校所在地の地域の他に日本又は世界から一つの地域を選んで扱う」こと、また各事例地域では「取り上げた地域における特徴的な事象とその動きに着目し、他の事象を有機的に関連付けるかたちで多面的・多角的に追究する地誌」と「取り上げた地域の多様な事象を項目ごとに整理するかたちで多面的・多角的に追究する地誌」との「両方の地誌を学習できるよう工夫する」ことなどが求められている。地域調査については、(2)ア「市町村規模の地域」の内容で「直接的に調査できる地域の特色を多面的・多角的に調査して、日常生活圏、行動圏の地域性を地誌的にとらえさせるとともに、日本又は世界の中から同規模の地域を取り上げて地誌的に考察し、それらを比較し関連付けることを通して市町村規模の地域を地誌的にとらえる視点や方法を身に付けさせる。」とあるように、具体的に作業的・体験的学習を通して地誌的にとらえる視点や方法を学ぶことが求められている。

本稿では、表題の一部に「地域事象の教材化」という表現を用いたが、現代世界の各地域に生じし存在する森羅万象を「地域事象」として、これを位置や空間的な広がりとのかわりごとにとらえる事が地理での教材化であり、この教材化された「地域事象」を「地理的事象」とした。また、森羅万象を地域事象とするとしたが、これは、幾多の属性(空間的、時間的、経済的、社会的など)が重合している森羅万象の中で、地理では場所(空間的位置)の属性を優先的に考えるということの意味している。そして、これは森羅万象に付随する場所の情報や場所の持つ意味を常に考え、これらの地域的な広がりを捉えるという視点を大切にするという事である。

上記のように、地理A・地理Bともに地域調査が学習指導要領の内容として重視されており、この実施が求められている。しかし、現実にこれらの教育内容を実現していくには相当の準備が必要となるようである。先ず、授業時間枠の中で短時間の間に効果的な地域調査が出来るのかという疑問、次に交通事故などの不測の事態に備えた態勢が学校や教員側に十分出来るかという問題、さらには、地域調査といっても地域的に特徴のない学区で生徒に何をさせたらよいのか分からないといった根本的課題もあった。これらの諸問題を一つ一つ解決してゆかなければ、実際に地域調査を授業の一環として実現していくことは困難である。

今回、「地域調査」の実施校として岐阜県立加納高校のご協力が得られた。前述の諸点について見ると、先ず、幸いにして加納高校では1コマの授業時間が65分と長いこと、また授業中の交通安全に学校上げての協力態勢がとられたこと、授業実施の教員の熱心な指導があったことなどから「地域調査」を実現できたのである。このように特殊な事例ではなく、地域調査を平成16年度からの新指導要領の学年進行の完了と共に、平常の授業の中で実施できるようにするためには、どのような取り組みが必要なのであろうか。

校外学習の実現に最も必要な条件は、地域調査が地理の授業では不可欠であることを学校全体に認識してもらえることであり、地理の授業担当者にはそのための努力が必要である。地域調査を通じた作業的・体験的な授業によって、いかに生徒に「知的な驚き」を与えることが出来るか、学校全体にその効果を目に見えるようなかたちで表すことが出来れば、少なくとも心理的な負担をより少なくして「地域調査」を継続的に実施することが出来るのではなかろうか。また、たとえ校外に出る時間が30分しか確保できなくとも、生徒自身の新しい発見によって強烈な知的刺激が生まれれば、これを契機に地理的見方や考え方を生徒に定着させていくことが出来るのではなかろうか。

ふたつの「二」から発想する

岡本太郎は火焰土器を発見したとその著書の中で述べている。しかし、実際に長岡市で「火焰土器」を発掘したわけではない。1951年に東京国立博物館で火焰型土器と出会うことによって、その価値を自分の中に見いだしたのである。また地理学や文化人類学などでは、よく「現地をして語らしめよ」という事が言われている。野外科学の一面を持つ地理学では、地域の「生」の情報から知識を集成していくことが大切であり、高等学校での「地域調査」でもこうした醍醐味を生徒自身が体験することは、大いに地理教育の効果を高めることに繋がると考える。

学校周辺でも日常的にげなく見過ごしていることから、何かの地理的な存在の原理を見出せたとしたら、それはある意味での生徒自身の発見である。こうした発見が次々と出来て、これらに学区という狭い地域の中でも、地理的事象の配置には系統性や法則性があることに気づいたとしたり、毎日の通学路もずいぶん楽しくなるのではなかろうか。以下では、先ず岐阜市のこれらの場所を歩いた人なら誰でもが目にすることのできる“ふたつの「二」”を手がかりとして、岐阜市周辺地域を見る視点について考え始めたい。

1. 加納高校周辺地域の「二」

加納高校の正面入り口の近くに文房具・図書を扱う「二中堂」というお店がある。これが一つ目の「二」である。先ず、ここではまだ学校の前に文房具や図書を扱うお店が存立していることに注目した。またお店の名前にとっても興味を感じた。はたして、「二中堂」とはこのお店の歴史を語るような名前であった。加納高校はかつての岐阜二中と加納女学校とが統合された学校であり、「二中堂」は加納高校の前身の名前を冠していることになる。

加納高校に通う生徒にとっては、「二中堂」がここにあるということは既定の事実であって、また自身がかつて通っていた中学校や小学校の周りにも文房具関連の店舗があったりすれば、このような店舗が学校の周りにあること自体を、当たり前のことであると認識してはいないだろうか。他方、既に大都市地域での学校の周りにはこうした文房具を扱うお店は少なくなっている。このような地域の学校の生徒にとっては、学校の周りには文房具関連の店舗が立地していないことが普通のことのように感じられるかもしれない。こうしたことは一体何を意味しているのであろうか。このような文房具を扱う店舗の立地から、なにか地理的な見方や考え方に基づく事実を引き出すことが出来ないだろうか。

1) 岐阜市における文房具関連の店舗を地域事象とした教材化

岐阜市の加納高校前に立地する「二中堂」を位置や広がりで見るとどうなるだろう。ここで、岐阜市内の文房具関連の店舗を取り上げこれを教材化してみよう。岐阜市の中心市街地の一部について、分布図を作成するにあたっては、市街地とその郊外地域との境界地域を含めて地域的範囲とした。この理由は、前述の大都市地域では学校と文房具関連の店舗立地との関連が稀薄になってきていることから、都市化された地域と都市化されていない地域では、文房具関連の店舗の立地形態が異なるのではないかという仮説が前提となっている。

分布図作成の方法としては、先ず地形図を用意して、次にインターネットタウンページから文房具関連の店舗として文房具・事務用品店を検索項目としてリストアップした。このサイトでは各店舗の立地位置が地図上で示されている（図1）。この公開されている情報を用いれば、たとえ一度も尋ねたことのない地域であっても、かなり正確な分布図を容易に作成することが出来る。ただし、この資料を用いる際の留意点は、この資料で用いられている分類に沿った分布図しか作成出来ないということであり、自分の知りたい地域事象の分布を的確に捉えることが出来るかには、限界もあるということである。この他、東京大学空間情報センターのサイトにアクセスして、CSVアドレスマッチングサービスを用いて分布図を作成する方法もある。

さて、図2はこうして作成した分布図である。これから一体何を読みとることが出来るだろうか。大まかには、文房具・事務用品店を扱う店舗の分布では、市街地での分布密度が高く、県庁や市役所などの官庁街の近隣では主要道路沿いに多く分布し、駅周辺の地域には少ないのではないかとということ。また、郊外地域の分布密度は低いのではないかとということが分かる。「何だ、この程度ならこんな分布図を作って苦労しなくとも常識で分かるではないか」という声が聞こえる。

次に、図3で「二中堂」のように学校の周りに立地している文房具・事務用品店と、そうではない店舗とに区分して分布図に表してみよう。「二中堂」は市街地南西部の郊外地域との境界部に緑の点で「学校隣接の文房具・事務用品店」として立地している。分布図全体から概観して、市街地中心部では「学校非隣接の文房具・事務用品店」が多く立地しているようであり、郊外地域では「学校隣接の文房具・事務用品店」が多く、市街地縁辺部では両者が混在して立地しているようである。分布図には表されていないが、岐阜市の農村地域では学校と文房具関連の店舗の立地にはもっと強い関連性が見られている。「これでも常識の範囲を出ていない」という感想もあるだろう。

さらに図4では、インターネットタウンページで得られる、文房具・事務用品を扱う店舗が他にも営業している業種も資料として加えて類型化し、分布図を作成した。この分布図では、「学校隣接の文房具・事務用品店」は中心部を緑で示した。その中で、文房具・事務用品のみを扱う店舗には周囲を青のリングで囲んだ。また、兼業のあるものについては、兼業についての色区分をリングに表した。例えば「二中堂」の兼業は書店であるので、中心は緑でリングは紫の印で示してある。また、「学校非隣接の文房具・事務用品店」については、文房具・事務用品のみを扱う店舗は青の丸で示し、兼業のあるものについてはその兼業の色区分で示した。例えば、JR岐阜駅の北西に示したオレンジ色の丸は、文房具・事務用品と印鑑を扱う店舗である。これによると、岐阜市の都心部に事務用機器取扱いを兼ねる店舗が多く、「学校隣接の文房具・事務用品店」の中にも同様の兼業店舗があるということ、さらに市街地から若干離れた地域でも都心から同心円のゾーンに事務用機器取扱いを兼ねる店舗が見られる。こうしたファックスやコピー機器取扱いの店舗は、一般に都心部のオフィス街に立地するものの他に、郊外の比較的交通便利で地価の安いところに広めの事務機器センターを設ける場合が多く、岐阜市ではこうした地域的な傾向が比較的明瞭に認められる。また、書店を兼業とする店舗が市街地縁辺部に3店舗見られ、駅近くには印鑑取扱いを兼業とする店舗、繁華街の柳川近くにファンシーショップを兼業とする店舗、市街地の東側の郊外地域に日用雑貨・洋品販売を兼業とする店舗があることなどは立地的に面白い現象である。「学校隣接の文房具・事務用品店」の兼業形態を見ると、大方は文房具・事務用品のみを扱う店舗であるが、郊外地域では書店と兼業の店舗、市街地では菓子販売や学校教材取扱いと兼業の店舗もある。また、市街地と郊外地域の双方に事務用機器取扱いを兼ねる店舗がそれぞれ1店舗立地していた。

この様に、「岐阜市の加納高校前に立地する二中堂を位置や広がりで見るとどうなるだろう」ということから、先ず文房具・事務用品店の位置だけを見た場合、次に他の地域事象(この場合は学校)との関連で考えた場合、さらに兼業という属性に注目して考えた場合とに分けて、段階的に地域事象の持つ属性を分類して分布図に表してきた。これらの文房具・事務用品店という地域事象の立地の類似性を見たり、種々の類型に分けた場合の配置の傾向を見たり、官庁街・繁華街・住宅街などの地域の特性と考え合わせたり、都心地域・市街地縁辺地域・郊外地域などの地域の構造との関連で考えたりすることで、地域事象を地理的事象として認識していく教材化のプロセスの一例としたい。

2)岐阜市・大垣市・高山市の文房具関連の店舗分布から考える

前項で岐阜市における文房具関連の店舗について、教材化という観点から考えてきた。しかし、これだけでは先に述べた「文房具を扱う店舗の立地から、なにか地理的な見方や考え方に基づく事実を引き出す」ことにはなっても、「何かの地理的な存在の原理を見出せた」というには物足りない。ここに前項とほぼ同様の過程を経て、人口規模の異なる大垣市と高山市の文房具・事務用品について分布図に表したものを示す(図5・6・7・8)。

これらを概観すれば、大垣市では岐阜市と比較して、市街地とその周辺地域に立地する店舗の数自体が少なく、兼業のある店舗も少ない。兼業の多くは事務用機器取扱いであるが、これらの多くは市街地に立地しているが、店舗分布は分散的であり、岐阜市ほど立地に傾向性は見られない。また、高山市では市街地に密集した分布を示しており、市街地でも最も早くから市街地化していた古い町並みや宮川の周辺に印鑑取扱いや事務用機器取扱いの店舗が集中している。この古くからの市街地の密集地域を取り巻くように、市街地縁辺に文房具・事務用品店の分布ゾーンがある。駅前地域と駅の西側の新市街地、市街地の西の郊外地域に事務用機器取扱いの店舗が立地している。高山本線沿線から西側の比較的新しく市街地化された地域には、店舗を大規模小売店舗の中に構えた専門店も見られる。「学校隣接の文房具・事務用品店」は少数であるが、市街地の北端と南端とに立地している。文房具・事務用品のみを扱い兼業を持たない店舗は、市街地の北・南や東の縁辺部にその多くが分布している。

これらの三都市の文房具・事務用品の店舗の分布を見れば、店舗の集中や分散その地域的配置に差異が見られる。これらの分布の差異と、各都市の都市規模・都市の特性・都市の歴史・都市構造・他都市との位置関係などを検討し、方法論としては基本的な地域間比較を行うことによって、文房具・事務用品の店舗の地域特性を考えることも可能であろうし、文房具・事務用品の店舗を指標として都市の性格について考えることも可能となる。

このことをさらに発展させて行けば、系統地理的な学習や地誌的な学習にも広げていくことが出来よう。大都市地域での小売商店は、スーパーマーケットやコンビニの進出、さらに土地バブルでの再開発の波に吞まれて随分とその数を減らしてきたが、文房具関連の店舗もこの例外ではなかった。名古屋市への近接性が高まると共に、買い廻り商品関連の商圈の衰退が指摘されている岐阜市の地域的な状況もあり、こうした全国的・圏域的な視点から考えれば課題的な学習としても深めてゆけると考える。

2. 細畑の「二」

「二中堂」の「二」は、加納高校の生徒なら、正面入り口の前に立地しているお店の話から説き起すわけであるから、教室内の授業でも上記の作業については出来ることになる。ところが、細畑の「二」は実際にその場に行かないと何のことが分からない。細畑はかつての中山道の通った集落である。ここには一里塚が置かれ、旅人の旅程の目印となると共に休息の場となった。この一里塚の横に「二ツ山」という店名のうなぎ料理店がある。これが二つ目の「二」である（プレゼンテーション資料No. 3）。

では、なぜ店名が「二ツ山」なのか。以下はこの地を歩いてみての推測である。細畑は金華山に連なる山地の南側に位置するが、この辺りでは木曾川や長良川などの大河川と共に中小の河川が乱流し、自然堤防より高い所は少なかったと考えられる。1604年に作られた細畑の一里塚の形態は、街道の両側にそれぞれ5間四方(約80㎡)の基礎を置き、築山の上に榎などの樹木を植えていたものである。つまりは、この二つの築山にちなんで命名したのではなかろうか。確かなことはお店に聞き取り調査をしたり古文書にあたったりしなければ分からないことだろうが、とても面白い店名だと感じた。

この一里塚のある細畑(ほそばた)は、近世には美濃国厚見(あつみ)郡に属しており、長森騒動記によればこの地名の由来は「厚見郡より東へ凡そ百町程水中に陸路差出し、細畑という」とされている。南側にはかつての美濃と尾張との国境をなす境川が流れ、北側には湖沼が広がる間に、自然堤防が境川沿いに東に延びていたことから名付けられたものと思われる。そして、この辺りではこの自然堤防上を中山道が通っていたということである。また、細畑の東側には切通という地名があるが、ここには三方を沼沢に囲まれた要害の地ということからかつて長森城がおかれたこともある。この地名の由来は、切通の北側に位置する低地の水をここで境川に落としていたことによるとのことである。こうした史料と地形図と併せて見ると、「境川の北側に、周囲の土地と比べてわずかに高い自然堤防が細長く東側に繋がる土地があり、ここが細畑と名付けられた。この堤防状の微高地があるために、金華

山に連なる山地との間にあたる北側地域が低湿であったことから、微高地を開削して水を境川に落とし、ここを切通と名付けた」という情景が頭に浮かび、地名の連関性を読みとることが出来る。現地では境川から北側に自然堤防を越え低地までを歩き、この高低差を実感したい。

さて、古くからの地名や店名などは、何かにちなんで付けられていることが多い。地域を歩くときには事前に調べてから現地を歩くのも楽しいことだが、これらも教材として用いて、その地名が地形や地物から由来するするのか、歴史的な経緯から付けられたものなのか、地名や店名などからいろいろとその由来を類推することも「地域調査」への興味を増すことになりはしないだろうか。こうした場合、生徒にはすぐには人に尋ねさせないで、自分で仮説を立てさせることが大切であり、検証はその後の過程としたい。

小学校からなされている「地域調査」とその段階的継続

1. 小学校・中学校での「地域調査」に関わる学習指導要領と教科書記述

高等学校での「地域調査」の位置づけと、校区にある地域事象の教材化の例について述べてきたが、新指導要領では既に小学校から段階的に「地域調査」の基礎・基本が学べるような配慮がなされている。

プレゼンテーション資料No.1にも見るように、小学校第3学年及び第4学年の学習指導要領では、大項目(1)で「自分たちの住んでいる身近な地域や市(区, 町, 村)について、次のことを観察, 調査したり白地図にまとめたりして調べ…」として地域調査の実施を規定し、中項目アで「…特色ある地形, 土地利用の様子, 主な公共施設などの場所と働き, 交通のようすなど」を上げてこれらを学習することとなっている。

各社の教科書での記述例を示したが、身近な地域の調査や町探検として、目当てを決める、行く場所を決める、コースを考える、発見したこと不思議の思ったことをメモする、詳しい地図を見ながら簡単な地図を作る、他地域と比較する・場所による違いを探す・地域の特徴を大まかに掴む・地域の特徴の同じ所を囲む、分かったことを地図に表してみんなに紹介するなどの事項を取り上げている。すなわち、大項目(1)の「…地域の様子は場所によって違いがあることを考えるようにする」という内容について十分に学べるようになっており、上記のことから「地域の見方の初歩」は小学校で既に学んでいるということが言えよう。

次に、中学校での「地域調査」についてはどのように学習指導要領で規定されているかを見よう。中学校では大項目(2)「地域の規模に応じた調査」の中項目アで身近な地域を取り上げることとなっている。ここでは「身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、…」と謳われており、地域調査の実施を規定している。

中学校の教科書についても各社の記述例をプレゼンテーション資料No.1に示したが、小学校での「地域調査」の項目に加えて、古い住宅地図と現在とを比較する、地形図・文献・統計資料・インターネットを利用した資料収集、アンケート調査・聞き取り調査、仮説を立ててこれを裏付ける資料を集める、分布図にまとめるなどの内容が含まれてきており、中項目アに示されているように「…市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法, 地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる」ことが出来るようになっている。

2. 高等学校での教科書記述と教科書の性格

高等学校での「地域調査」に関わる教科書記述の例を見ると、で見たような新学習指導要領に準拠して、地理Aでは 新旧地形図の読図と比較、 地域調査の流れ、 ルートマップと写真による地域認識、 新旧の写真や地形図の比較、 ドットマップで地域事象を認識する、 インターネットによる予備調査、 地域調査に適した地図の選択などを取り上げている。また、地理Bでは 地域の規模による調査の視点・方法・資料、 市町村規模の地域の調査から報告書までの流れ、 静態的地誌

と動態的地誌、地域の規模に応じた視点・方法・分析・まとめなどを取り上げており、それぞれ各出版社によって種々の地理的技法や地理的な見方や考え方を学習できるような配慮がなされている。

複数時点の地形図を讀図し比較する方法は、教室で地域を概観し、その変化を讀みとる方法として非常に有効である。資料として、埼玉県熊谷市の地形図でその地域的变化を讀みとったものについて示した（配布資料No.2）。岐阜市と熊谷市には共通点も多いことから、生徒の讀図の際の参考にもなると考える（プレゼンテーション資料No.1）。

教科書は「主たる教材」としての位置づけがなされているが、第二次世界大戦前の教科書では岐阜市がどのように記述されていたのかという例を見よう（プレゼンテーション資料No.1）。田中啓爾著の『中等 日本地理』昭和四年二月十九日 中學校・師範學校地理科 文部省檢定済の教科書は広く用いられていた。これによると、岐阜市については第一編「地方誌」第二章「中部地方」に、「岐阜市は長良川に臨む舊城下町、今は縣政の中心で絹織物を産する。」という記述のみであり、注として「提灯、團扇、傘等を特産とする」とある。地方誌は当時の日本全体について記述してある部分であるが、どの都市や地域もさほど文章記述に多くを割いてはいない。この理由は、緒言の「編集上特に留意した点」として上げられている12項に記されている。そのポイントを略述すれば、「初等教育の地理書との連絡については徒に重複することを避けた」、「各地方を詳述するに幾多の地理区に分かつて説いた」、「各地方誌に於いて最初に地形・気候等の自然を説くにはそれぞれ地形区・気候区により、且つその場合人文との関連については一言も言及せず、処誌を述べる時に到って、人文とそれ等との関係を学習者に発見せしめ、最後に人文の節に於いて帰納的に統括した」、「巻末の総説の篇においては各地方別に習得した知識の相互の関係を系統づける点に重きを置き、すべて帰納的に説述した」、「記述は単に羅列的にせず、紙数の許す限り説明的にし、問題は能う限り地理的意義の豊富なものを選んだ」、「各地の標識的の現象は重要視して殊に多くの紙数を割いた」、「教材の配列については、中央の日本から西南の日本及び東北の日本へ順次に説き及ぼし、地形・気候・人文等の変化が推移のまま系統的に学習者に印象される如くした」、「カットの選択に際しては陸地測量部の各種の地図を挿入して、これ等によって地理的讀図力を養成し、将来の応用を期待した」、「地形図・気候図・交通運輸図等を多く掲げたのは学習者に地理的に考察させて理法を発見させるため、ドットマップの生産分布図を二種類併用したのはその生産地域・生産額及び府県別の産額等を知るに便ならしめるためである」、「模型図及び飛行機から見た写真等を多く採用して、地図と相俟って地理的考察力の増進をはかり、又模型図及び各種の地図に地名を省いたのは学習者をしてこれによって暗射（そらで言い当てる）し練習させるためである」、「歴史沿革図を挿入したのは新旧を対照し、その変化により理法を会得させるためである」、「統計はできるだけ地図化して地理的表現につとめた」である。この編集方針はある意味で地理教育の本質を指し示しているようにも感じる。この方針については、教科書を教授する教員向けに書かれた『中等 日本地理資料』（非売品）にさらに詳しく記述されている。

田中啓爾の教科書を見ると、前記の方針に従って地形図やドットマップ・航空写真・地形のレリーフマップ・地形分類図・景観写真などが数多く入れられており、前ページに占めるこれらの割合は文章記述部分よりも相当上回るように感じる。統計表の数は少なく、グラフ類に加工されて示されているものが多い。グラフ類では年次変化を示すための折れ線グラフ・棒グラフや気温と降水量の月別変動グラフなどが多く掲載され、これに構成を示す円グラフが若干みられる。分布図類では、コロプレスマップ（行政区分による統計などを階級区分して示した図）が1枚もなく、統計量の分布にはドットマップにこだわった姿勢が讀みとれる。この傾向は『中等 新地理概説 改訂版』でも強いが、「日本人口密度」などでは数少ないカラー印刷で当時の市郡別人口密度の階級区分図を掲載している。一方、教科書の工夫として北アルプス周辺地域の航空写真の頁にトレーシングペーパーが綴じ込まれており、これには谷線が書き込まれており、航空写真の頁に重ねると急峻な地形の様子がより良く讀みとることが出来る。

さて、田中啓爾の教科書を例に戦前の地理教科書を見てきたが、これらの教科書では必ずしも掲載されている地図・グラフ・写真類を文章で説明しているわけではない。むしろ、生徒に読みとらせるために記述がかなり限定的であると感じる。これも編集方針にある「学習者に地理的に考察させて理法を発見させるため」なのであろう。かつて、「教科書を教える」あるいは「教科書で教える」というような論議もあった。また、「教科書には答えが書いてあるので使いにくい」という話もあった。しかしながら、教員は生徒と同じ教科書を読んでも、「この文から、この図から、この表から、これらを組み合わせるとこんな事が分かるんだよ」という事を示して欲しいし、生徒に「先生は、同じ所を読んでもこんな事が分かるのか」という驚きを与える授業を展開して欲しい。「学び方を学ぶ学習」にあっては、教科書をパートナーとして「教科書と教える」ぐらいに、教員自身が保持している能力を教科書を手段として引き出すという積極的な姿勢が大切である。こうした意味で「教員自身が真の教科書」と感じている。

3. 「地域調査」の継続性と地理的技能や地理的な視点や方法の定着

小学校・中学校・高等学校における新学習指導要領での地域調査について述べてきたが、小学校・中学校では新学習指導要領が平成14年度から完全実施され、これに準拠した教科書が用い始められている。高等学校では平成15年度から学年進行で実施されているが、実際に小学校・中学校で地域調査に関わる内容を、この新学習指導要領で学んだ児童や生徒が最初に高等学校に入学するのは、中学校1年生での履修者が平成17年度であり、小学校3年生での履修者では平成21年度である。従って、平成16年度の高等学校入学生は新旧学習指導要領の移行期間で学んできた中学生ということになる。

このような状況から、来年度の入学生は「地域調査」にあまり慣れていない可能性もあり、高等学校で初歩から再教育する必要もあるかもしれない。しかし、平成17年度以降の入学生は新学習指導要領のもとでの「地域調査」を体験してきているはずであり、こうした経験を想起させつつ、小学校での身近な地域の学習や中学校での地理的分野の基礎の上にならって、高等学校でも地理的技能や地理的な視点や方法を継続的に習得させ、これらの能力を定着させていきたいものである。

「地域調査」における地理的な見方や考え方

1. 地域の顔・骨組み・土地柄

埼玉県熊谷市の北口駅前には、ラグビーボールのブロンズ像と鎌倉時代の武将熊谷次郎直実の銅像とがある（配布資料No.2写真）。前者は市の標語である「ラグビータウン熊谷」を表象するものであり、後者は熊谷氏の所領であった中世の武蔵国熊谷郷以来の地名を受け継ぐことを表象するものである。また、山梨県甲府市の甲府駅前には武田信玄の銅像がどっかりと座っている。このように、駅前には何かしらその都市や地域のシンボルとなるものが置かれていることが多い。服部銈二郎はその著書『浅草・上野物語』で、都市の個性が生み出す表情を「まちの顔」、まちの特徴を形作る根幹としての地形・河川・気候などの「骨組み」、他の土地には見られない地域性としての「土地柄」を上げつつ、浅草と上野のそれぞれの在り様を描いたり、これらを比較したり、江戸・東京の下町としてまとめて歴史的文化遺産の宝庫として捉えたり、世界から見た個性ある「まち」としてのそれぞれのシンボル(象徴)と役割などについて述べている。いろいろの地域を初めて訪れる際に、駅前を見たり、中心街を見たり、繁華街を見たりして「この地域はどんな地域なのだろう」と考える。その際の視点や情報の整理方法として、「顔・骨組み・土地柄」を考えてみよう。

ところで岐阜市の「顔・骨組み・土地柄」は何であろう。これらを考える材料を集めてみよう。名古屋から電車で岐阜市の方に向かってくると、金華山とその山頂付近にお城が見える。お城が見えると、歴史上の人物として斎藤道三や織田信長の名前が浮かんでくるが、岐阜駅前には熊谷駅や甲府駅のように武将の銅像はない。駅北口の正面には今も繊維問屋街があるものの、ハルピン街やワシントン通り繊維街などの名前が付いているアーケード街はかなり寂れている。一方、駅の建物は新しく、

ここには種々の商業施設や公共施設も入居しており、駅周辺地域の再開発も徐々に進められているらしい。駅の南口はまだ駅前地域としての様相を呈していないが、ロータリーや駐車場などの整備は済んでいる。この南口駅前には平成14年2月に十数階の比較的高層な「日本泉」という名の入ったビルが完成し、上層階はマンションに利用され、下層階にはテナント用フロアがある。ここは日本酒の醸造元で、1階には酒造会社のショールームや販売施設があるほか、地下には工場もある。ここで醸造している酒の宣伝が隣接のタワー駐車場とおぼしき壁面に出ており、「美濃の男酒 織田信長」と「美濃の濃口 濃姫」と書いてある。10月3・4日には「ぎふ信長まつり」が開かれており、種々のイベントも企画されている。春には「道三祭り」も開かれているようであるが、岐阜市における信長への思い入れ、岐阜市の信長をシンボルとする意識はかなり強いものであろう。

では、地形や河川はどうであろう。市街地は長良川と木曾川とに挟まれた沖積平野に位置しているが、市街地中心部はおおむね金華山の麓を扇頂部とする扇状地の上に展開している。前述の酒造業も加納清水町という町が所在地であり、扇状地の末端部にあたることから、醸造用の水を井戸でくみ上げている。荒田川・新荒田川や境川も東から西へ市街地の南側を流れており、これらの河川に小河川が流れ込んでいる。

また、土地柄に繋がるものは何か。柳ヶ瀬ブルースで一世を風靡した繁華街もシャッターの閉まった店があちこちに見られて一頃の元気はない。名古屋駅までJRの快速に乗れば約20分であり、岐阜市の高級買廻品の商圈は名古屋市に奪われており、商業面でも衰微しているようだ。ざっと見たところでの地域性は、県庁所在都市としての地方中心性と、長良川の鵜飼いや岐阜城などの「信長」関連の観光地としての性格を併せ持つ都市、という事に集約できるのかもしれない。

2. 「地域調査」での観察の基本

地域事象には幾多の属性があるということについては既に述べた。その際、地域事象の場所(空間的位置)の属性を優先的に考えるということも記しておいた。しかし、他の属性は考えないのかという決してそうではない。他の属性も「位置と空間的広がり」に注目して地域という枠組みの中で捉えることによって分析の対象となるのである。

稲永幸男は「地理学における調査の基本」として二宮書店のフィールドノートに8段階を設定している。何が、どこに、いつ、なぜか、こうだろう、ほんとうか、なにがいえるか、問題があるか、の8段階である(プレゼンテーション資料No.1)。この内、～までが地域調査でも地域事象の認識に関わる段階といえるだろう。

もちろん地域事象の中には、地形や建物などのように目に見える事象もあれば、暑さ・寒さなどの気温や織機の機械音などのように、目には見えないが肌で感じたり耳に聞こえたりするような五感で捉えられる事象がある。地域を歩く際には、常になにか「その場所ならでは」の地域事象がないか、自分が日常過ごしている場所や他の地域と比較しながら、どこでも見られることと区別することを意識して観察する必要がある(プレゼンテーション資料No.3)。つまりは、無意識にseaするのではなく、意識してwatchするということである。ただ単にhearしているのではなく、耳をそばだててlistenするということである。そうすれば、一つ一つがバラバラの地域事象も関連性を持って認識され、地域という連続帯の中に位置づけて地理的事象として見いだせるようになるはずである。

一方では、その地域の人々に聴いたり、統計に当たって見なければ分からない地域事象もある。これらの聴き取ったことや統計資料を、地図上に落として考える事が大切である。こうした事からも、「地域調査」では生徒にも常に、自分がどこにいるのかや、どこを歩いているのかを地図上で確認させておくべきである。そして調べたことは地図上の位置と結び付くように整理し、後でそれらの資料を分布図に展開できるようにすることが肝要である。

3. 地理的な見方や考え方の基本

地域事象から地理的事象への認識上の転成のキーワードは「地域」である。根底に「地域」といういわば「お釈迦様の掌」のような、概念こそ定義されているものの大きさは融通無碍といった枠組みがあるからこそ、述べたように地域事象も「位置や空間的な広がりとのかわり」で地理的事象として見いだすことが出来る。では、「事象を地域という枠組みの中で考察する」ことが地理的な考え方に結び付くとすれば、具体的にどのように考察すれば良いのだろうか。

この答えのヒントは『中学校学習指導要領(平成10年12月) 解説 社会編』に詳しい。高等学校の教員の方にこの本を読んで下さいというのは失礼にあたるかもしれないが、中学校学習指導要領の社会科地理的分野の目標に「地理的な見方や考え方の基礎を培い」とあるように、高等学校学習指導要領の地理A・地理Bの目標で示した「地理的な見方や考え方を培い」の基礎は中学校で習得することになっている。こうしたことから『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』よりも丁寧な解説がなされている。地理で用いる「地域」の概念についても中学校の解説には図示してあるが、高等学校の解説では割愛されている。ちなみに、この中学校の解説書の価格は本体90円で消費税込みの定価が95円であり、100円ショップでも十分に販売できるのではないかと思ったりしている。

地域という用語は、他の学問分野やマスコミでも一般的に用いられるようになったことから、ある意味では地理で用いる「地域」が不透明になっているように感じている。地理学で言うところの「地域」とは、巷間で用いられているような単なる任意の区域の広がりではなく、「個性的な内容を有する広がり」である。中学校の解説書によれば、地域の概念を先ず形式地域と実質地域とに分け、実質地域はさらに等質地域と機能地域とに分けている(プレゼンテーション資料No.1)。例えば、等質地域ではリンゴの栽培地域のように、リンゴを栽培しているという点において、地域内ならどの場所をとっても等質な地域的範囲を想定している。また、機能地域では都市圏のように、中心地域と周辺地域とが通勤・通学・通院や買い物・娯楽などで強く結び付いている地域的範囲を想定している。現実の地域ではこれらの大小様々な諸地域が複雑に入れ子構造になっており、一つの機能地域にいくつかの等質地域が含まれたり、この機能地域がより大きな機能地域の部分をなす部分地域となっていたりする。

「地域調査」から地域像を紡ぎ出す

1. 大学での野外実習の事例と高校での「地域調査」への援用

1) 三重県上野市の事例

大学での野外実習を体験されてきた教員の方も多いのではないと思うが、実際の野外実習の内容や方法は、指導教員や実施目的・対象地域によって相当の差異がある。三重県の事例では、大きく「上野市内の観察」、「伊賀焼の窯元へアンケート調査」、「グループによる自主テーマの調査」の三つに分けることができる(配布資料No.3)。

ここでは高等学校で実施しやすい「上野市内の観察」に沿って事例を説明する。半日といっても午後からの4時間程度を、資料の(7)p~(9)pに示すコースに沿って適宜説明と質問をしながら歩いた。むろんあまり時間をとって調べることも、初めて訪れた地域の全体像を把握させる事が目的である。

このコースでは、交通の利便性から駅に集合したためここがスタート地点となった。駅前では、交通の結節点としての交通密度を交通手段ごとに調べ、駅の持つ交通機能の強さを推定する資料を集める。また、駅前に在るものや立地している施設などから駅のもつ力を推測したりする。ここでは松尾芭蕉の銅像、投句箱、観光案内所があることに気づかせて、これらが何を意味しているのか仮説を立てさせる。駅前に金融機関がいくつか在ったとすると、それは全国展開の銀行か地方銀行かなど金融機関の性質を記録させておき、後に中心地の金融機関の状況と比較させたりする。

プレゼンテーション資料No.1で、「道路沿いのマンション」のスライドがあるが、この中央にバ

ス停と時刻表を写しておいたのも、バスの交通密度と、その運行タイプが朝夕型か昼間型かを知るためである。住宅団地に通じるバス路線では朝夕型の度合いが強く、都市内の循環型の路線では昼間型が多く見られる。このようなことも、時刻表から生徒に考えさせることが大切である。また、その次のスライドで「金融機関(支店から出張所そしてATM)」では、この地域での銀行の金融上の魅力が低下している理由を考えさせることを主眼としている。

の上野市の中心商店街では、どこに本店のある大規模小売店舗が進出しているのか、その売り場面積や駐車場の規模はどれくらいかを調べたりする。時間がなければ、大雑把に間口×奥行き×階数などで概算し、複数の店舗が在れば比較し、外観から立地の順序などを考えたりする。時間があれば、定礎などの石版から建設年などを調べることもある。

加納高校の北側に位置する「大規模小売店舗」のスライドのアピタでも、道路を生徒が渡る時に危険なら、前述のように推測させ、後で教員の調べたデータを知らせればよい。

上野市の では、地域の全体像を把握するのに、高いところから俯瞰することが有効なことから、伊賀上野城の天守閣からの景観観察を行った。また、街の構造を知る上で歴史的な経緯は欠かせない。是非、事前に地形図や市街地図などと対照できるように古地図などを用意して欲しい。スライドの「袖うだつのある家」はどこにあったか、それより西側の地域では見られなかったのはなぜかなどは、古地図との突き合わせでその理由が自ずと分かることになる。

加納高校の周辺は地形的には低平な所であるので、「地域調査」の前の時限でも学校の屋上から周辺地域を観察することが望ましい。また、「加納城下町の外れであった」のスライドで示したように、古地図は印刷物でなくとも良く、若干精度が落ちてCD-Rなどのデジタルデータを用いる方法もある。

上野市の では、市街地外縁部の土地利用を見ている。中心部を見たら対照のために必ず周辺地域の状況を見て、中心地域の影響力に対応して周辺地域からどのような求心的な関わりがあるかを見ておく。例えば、農家の家々の状況から中心地を支える力としての農村地域の豊かさを見たり、農家の振り売りがどこからきているのかを調べたりする。また、地形と農作物の対応を見たり、「桑町」では今でも桑畑があるのか、無いのならいつ頃まであったのか。桑から蚕へ、そして絹糸から伊賀組紐への関連はあるのかなどを連想させてみる。木材問屋や卸売商業団地・工場などはいずれも広い敷地を必要とする。市街地との位置関係や地価なども考えあわせたい。

加納高校の周辺では、わずかに見られる農地のほとんどが水田であり、所々で農家の自家用の野菜が生産されていたりするにすぎない。そこで、都市的土地利用に絞って、マンションやアパートなどを「道路沿いのマンション」や「四つ角の古いアパートと建設中のマンション」のスライドなどで見て、これらがどのような場所にあるのか、マンションのタイプはファミリータイプかワンルームかなどを調べさせる。また、不動産の価格は重要な住宅地を見るための指標であるので、不動産の店舗が在った場合にはその広告をよく見たり、新聞の折り込み広告やマンションのパンフレットなどを教員側が事前に入手しておくことも望ましい。

上野市の は、市街地の内部の道路沿線景観と主要道路の沿線景観との差異を認識させるためのコースである。「いがうえの」のゲートがあるということは、少なくともこれが建設されたときには、このゲートの辺りが、「いわゆる街とその周辺地域との境であった」と認識されていたとの仮定も出来る。また、このゲートから市街地中心部へと歩くに従って、どのように沿線景観が変化するかを把握させることもねらいであった。

「自動車ディーラーの立地する道路」のスライドは、市街地と郊外地域との境界地域を通るバイパスの性格をもつ道路景観を示すためのものである。自動車ディーラーはもともと道路との関連の強い業種であるが、これらもどのメーカーのディーラーがどこに立地しているのかなどを把握させたい。

学校での歩いて回る「地域調査」のコースでは、出発点と帰着点が一致する一筆書きになることが多い。この時にも、観察の序列性と、ルートが地域の性格をよく示しているポイントを結んでいることを織り込んで、コースの設定をすることが大切である。

2)山口県萩市の事例

の3で、地域は「個性的な内容を有する広がり」であることを述べた。つまり、地域は人間の個性と同じようにそれぞれ独特の個性を持ち、これを地域的性格、すなわち「地域性」と呼んでいる。この地域性は、それぞれの地域の中で自然的・人文的な構成要素が種々に関連しあって醸成される総合的な個性ということができる。以下では萩市を例に、地理的事象やその他の情報を地域性としてまとめたものを説明しよう(配布資料No.4)。ここでは徒歩で歩いた範囲の観察内容を中心として、萩市の地域性の連関と、それらがどのように萩市内で展開しているかについてを地域の構造として図に表した。

まず、“史跡観光都市「萩」の地域性”では、自然的な条件を一番上に書いて、これらと人文的な現象・事象との連関を結んでいった。萩市は山口県でも日本海側に位置しており、この沿岸には暖流である対馬海流が流れている。暖流のお陰で、沿岸地域では暖地性の植物が繁茂している。明治維新後に武士階級を中心として職のない人が増えたので、土族授産として暖地性を生かした夏みかんの栽培が盛んとなった。近年では夏みかんの生食が減ったために、夏みかんを器などの工芸品に加工したり、ジュースや夏みかん菓子などの飲食品に加工したりしており、これが観光土産品ともなっている。こうした加工業は地元の夏みかんを原料とする原料指向型工業であり、これが萩市の工業地機能の一つとなっている。

萩の市街地は、二つの川に挟まれたデルタと、これらの川の排出する土砂が作り上げた浜堤状の砂堆とが比較的広い平地をなしていることから、藩政時代のからこの上に形成されている。また、二つの川から流れ出す土砂は沿岸流に流されて、砂堆を延ばし陸地と島とを繋なぎ陸繋島を形成している。こうした地形は城を築くのに好適であり、島の一つであった指月山には城郭が作られた。

二つの川の河口や陸繋島でも、沿岸流による砂の堆積の影響を受けない側には、沿岸漁業には好都合な小漁港が設けられ、漁業が発展した。砂浜では干物を乾燥させたり、獲れすぎた魚などを蒲鉾や竹輪などに加工する水産加工業が発達し、これも原料指向型工業であり、これが萩市の工業地機能の一つとなっている。水産加工品もまた重要な観光土産品となっている。

二つの川は舟運に利用され、市内を流れる支流の藍場川には鯉が放され、観光客の散策ルートになっている。萩は幕末まで防長の政治・経済・文化の中心地であり、萩焼は殿様窯として発展してきたが、維新後には広く供給されるようになり、これも観光土産品となっている。幕末の維新の志士達の屋敷の遺構や吉田松陰を祭った松陰神社、毛利家の菩提寺の東光寺などは観光資源としてもにぎわっている。

萩は、1863年の藩庁移転によって衰退したが、このお陰で第二次世界大戦では戦災を受けず、城下町の遺構が残された。それで街全体が城下町時代の史跡であるということから、「史跡観光都市」の名称を用いており、観光地機能が発達している。

このように萩市の地域性を見ると、県北の中心地としての中心地機能、史跡観光都市としての観光地機能、萩焼・水産加工品・飲食品などの工業地機能が関連しながら存在している。

次に、これらの地域性を織りなす地理的事象がどのように構造的に配置しているかについて、“史跡観光都市「萩」の地域構造”で見よう。まず、市街地は二つの川に挟まれたデルタと浜堤状の砂堆の上に展開している。この中でも最も土地の高い砂堆部分には寺町が形成され、次に高い所には旧萩城下町が広がっていた。橋本川に沿って延びる自然堤防上にも下級の武家屋敷があったりして、観光地機能も見られる。観光ホテル街は海岸近くの景観の良いところに帯状に広がり、河口近くでは水産加工業の立地が見られる。中心地はデルタ地帯に鉄道が引かれていないことから、微高地の東南端に位置するバスターミナルを核としていたが、近年はその南のバイパス沿いに新商業地域が形成されている。こうした中心地機能を構成する新商業地や行政機能・文教機能はこれまでは高度利用がなされていなかった微高地の南側の低地に立地している。また、東萩駅の市街地側にはビジネスホテルが発展しているが、微高地の東端に立地している旅館街は衰退の傾向にある。

このように、萩市に古くからある機能はデルタの中でも比較的土地の地盤の高い砂堆に立地しており、新しい機能は砂堆の南側の低地かデルタの外の東萩駅周辺地域に立地していることが分かる。

大学における短期間の野外実習では、調査テーマによっては指導教員の周知の地域で行われるとは限らない。教員自身が事前に下見に出掛けられる場合もあれば、学生と同じに初めて訪れる地域であったりもする。とは言え、地理的事象を捉える力を養っておけば、短期間に地域像を把握することはさほど難しくはない。高等学校での「地域調査」も、学校の実態や事情によって、調査テーマに合わせた地域に出掛けられる場合もあるだろうし、学校周辺で実施するしかない場合もあるだろう。しかし、一見して学校周辺があまり地域差のない住宅地域や農村地域、あるいは山間地域であるように見えても、担当教員の創意工夫次第では、地理的事象の見だしから、地理的な見方や考え方を習得させる「地域調査」を実施することが出来よう。以下の、2と3では加納高校周辺地域と岐阜市東郊の中山道周辺地域での地域歩きから、簡単な地域像を示したものである。

2. 加納高校周辺地域の地域像

「岐阜市市街地南郊の地域性」のスライドを用いて、適宜、プレゼンテーション資料No.2のスライド群を見ながら、加納高校周辺地域の地域像を考えてみよう（図9：緑の線で示したルートは下見の際のコースである）。

加納高校周辺地域の地域性を代表するものは、「市街地と郊外の境界」という性格である。地形的には長良川の金華山の麓を扇頂とする扇状地の末端部にあたり、南側には先端部の縁を廻るように流れる荒田川・新荒田川が流れている。中世の荘の境にもあたり、近世には加納城下町と農村部との境にも当たっている。現代でも市街地中心部から及ぶ都市化の力による都市的土地利用と、農村的土地利用との狭間の様相を呈している。

扇状地の末端部ということとは、北側に向かって高まる傾斜のある土地と荒田川沿いの低湿地との境ということである。ここでは、今は埋め立てられているが、かつて加納高校の庭には湧水による三つの池があったとのことや、現在の市営釜無墓地のあるところも、ガマと呼ばれる低湿地であったとのことと説明できる。大縮尺の地図で等高線をたどってみると、扇状地の構造がよく見える。

低湿なところは、「荒れた川」の意味合いから名付けられたという荒田川沿いの地域にも広がり、水害常襲地域となっている。ここでの古くからの農業集落では「水塚のある家」のスライドのように、水害時に待避する土盛りをした倉などが見られた。また、このような場所には地価が安いことや、市街地から若干離れていることから多少の騒音を出しても迷惑がかからなかったなどの理由で、工場が立地している。これらの工場は、「縫製関連工場の立地」のスライドで示すような、岐阜市ならではの繊維関連の中小工場であり、「ミシン修理店」のスライドで示すようなこれらに関連する店舗も立地している。

近世には加納城下町と農村部との境であったという点については、事前には、古地図と現在の地図とを対比して見ればわかる。一方、現地を歩いてみると「袖うだつのある家」のスライドのように、かつて城下町であったところでは伝統的な形を残す家も見られるが、新しく住宅地化されたところには見られない。かつて城下町の境界地域であったことは、学校の東側に「猿田彦神社」・「猿田彦神社由緒」のスライドで示すように、ここが加納城の鬼門にあたることから神社を祭ったことから判断できる。

都市的土地利用と農村的土地利用との混在という点では、「四つ角の古いアパートと建設中のマンション」・「道路沿いのマンション」・「大規模小売店舗」などに示すように、アパートよりも高度利用のマンション建設が進められ、大規模小売店舗が立地するなど、都市化の力が強く及んできていることが推測できる。これらのマンションは外見からはファミリータイプであり、大都市中心部や郊外の鉄道沿線地域に立地するようなワンルームタイプではないことにも、この地域の市街地への組み込み状況を推し量ることができる。また、加納高校の南西に位置する「縫製工場の下駄履きマンション」も住工混在地域としての変化を示している。

以上のような説明を、地図中に入れ込んだものが「岐阜市市街地南郊の地域性」のスライドであるが、これらの位置関係や地域的広がり、さらに変化の方向性などを認識することが、加納高校周辺地域の地域像を理解する上で有効である。

3．岐阜市東郊の中山道周辺地域の地域像

岐阜県高文連地域研究部会主催の中山道巡検に、地理関係のクラブに参加している生徒とその指導教員の方々と一緒に参加した。この巡検では中山道を歩くということで、かつては徳川家康が関ヶ原の戦いの際にわたったという地点に架けられている境川の両天橋、細畑の一里塚や明治水という古い看板のある店舗、秋葉神社を祭った家、加納宿の宿場の施設を示す石碑、道標などを見てきた。この巡検後に参加した高校生の方を対象として、「地域を歩くということ」という題で話した（プレゼンテーション資料No.3）。ここでは「岐阜市東郊地域の巡検資料」のスライドを用いて、適宜、プレゼンテーション資料No.3のスライド群を見ながら、岐阜市東郊の中山道周辺地域の地域像に絞って考えてみよう（図10：ピンクの線で示したルートは下見の際のコースである）。

岐阜市東郊の中山道周辺地域の地域性のキーワードは、「低地の性格とこの発展」である。2で述べたように、この地域は荒田川・境川・木曾川などの河川の乱流した沖積平野であり、河道や自然堤防とこの背面の低湿地などが縞状に入り組んでいる。今回の巡検では名鉄各務原線の細畑駅から歩き始めたが、この高架駅のプラットホームからは北側の低地がよく見渡せる。地図上で緑に着色してある水田は少なくともかつての低湿地であったと考えられる。茶色の丸で示した点は寺と墓地である。これらの位置を見ると、北側の山体から広がる微高地や自然堤防の微高地と低湿地との境に位置しており、このような所は「村はずれ」であったとも考えられる。

工業地域の分布を見ると、河川沿いに立地するタイプと微高地と低地との境に立地するタイプとがある。地図では具体的な業種は分からないが、河川に隣接して立地するものには、飲料や薬品などの工業で、河川沿いに豊かな地下水や表流水を使ったり排水に河川を利用するものや、また河川沿いの比較的地価の安い土地を目当てに立地するものなどが考えられる。加納城址の東側の対岸に広がる工場集積地では金属加工の工場が立地していた。

中山道沿いの地域では、領下の木曾街道と伊勢道の近道の追分けの近くには、織物工場が織機の音を響かせていた。また、中山道が東海道本線と交わるあたりには伝統的なノギリ型の屋根の工場が見られた。

中山道沿いの地域から南北の両側に向かって、地域道路やバイパス沿いに、低地部にも徐々に住宅地化が進展してきている。「細畑の一里塚近辺」のスライドに見られるように、左下のマンションの広告看板には単身者向けの宣伝文があり、ここでは加納高校周辺地域のマンションとは質の異なる住宅地化が進んでいるようである。細畑駅の北側にもアパートや低層マンションが立地している。仮説としては、こうした駅隣接の一戸あたりの部屋数の少ない住宅施設においても、同様に単身者の利用が多いと考えられる。このように住宅地化は、飛び地的には鉄道駅隣接地で進展しており、中山道に沿う地域では、一戸建ての住宅地化が既成住宅地に連続して南北の低地などに拡大している。

岐阜市東郊の中山道周辺地域では、自然堤防などの微高地はあるものの全体としては河川に挟まれた低地である。こうした地域が岐阜市の拡大としての住宅地化や河川に沿う地域などでの工業地化によって発展してきていると考えることができよう。

4．四つ角の看板からみた不思議

岐阜市の市内を歩いていて、岐阜駅南口の正面角地や、「四つ角に多い病院の看板」・「領下のバス停の看板」のスライドに示すような四つ角や交通機関の周辺に、医療関係の看板の多いことに驚いた（プレゼンテーション資料No.3）。一般的に四つ角の地価は周囲に比べて高く、ある意味では駅前スプロール現象のように空洞化する場合が見られる。こうした高度利用までの販売待ちの土地には、すぐに撤去可能な土地利用がなされ、看板の設置は最も手軽な利用形態であろう。

他の地域ではどうかという例を示すと、「大垣の四つ角の看板」のスライドには医療関連は1枚であり、「千葉県習志野市の四つ角の看板事例・事例2」のスライドでは医療関連の看板はあるものの、主流は宅地やマンションの不動産広告であったり、ショッピングセンターの道案内であったり、最近ではセレモニーセンターの案内であったりする。また、「千葉県館山市の四つ角の看板」のスライドでは、ホテルや観光施設の宣伝看板である。

このように地域によって看板広告も相当に変化が見られ、これらを調べるだけでも、看板広告圏の地域調査に発展させたり、それぞれの地域像を描くヒントを得ることも出来る。是非どなたかに、なぜ、岐阜市には医療関連の看板広告が卓越しているのかを調べていただき、この理由を知りたいものである。

足下から広げる地理的認識

「地域調査」の種は足下にいっぱい落ちている。これをどう育てて教材化するかが、学び方を学ぶ学習としての地域調査の成否を決めることになる。以上に述べてきたことが、身近な地域事象を用いて、生徒に地理的事象を認識する面白さを体験させるヒントにならないだろうか。さらに、願いとして、身近な個別の地理的事象の理解を、体系的（系統地理的・地誌的）な地域理解へと展開していくことが出来ないだろうかと考える。

つまり「地域調査」からも、学習指導要領の他の内容に繋げる道を開くことが出来るのではないかということである。身近な地域で見られる地理的事象の立地には、何らかの法則性・系統性が見られることから、これらを系統地理的な学習内容に発展させていく。また、身近な地域で見られる地域性と共通するものが、日本や世界のどこかで見られる場合に、これらを地誌的な学習内容に発展させていく。さらに、身近な地域での課題が、日本や世界のどこかで同じように見られる場合に、これらを課題学習に発展させていくように考えられないだろうか。

「地域調査」の資料や教育技術などの成果は、教員個人の蓄積だけではなく、各学校の社会科担当教員の共有財産として学校に保存し、代々新規に追加しながら活用していただきたい。学校周辺地域の地域資料（地図・文献・史料・統計など）は、歴史的分野でも政治経済的分野でも身近な題材として利用できる。また、教育は「生もの」であるとも言われる。生徒の実態に合わせた教育技術の積み上げは、直接に生徒の教育に携わっている教員の方々の方が豊かであるし、臨機応変の発想や対応も可能である。こうした知恵を、またこちらに環流していただければ幸いである。

おわりに

教育とは何だろうかという素朴な問いに、多くの先人が答えてきたし、またそれぞれの個人の考えもあるのだろう。まずは「人間を潜在能力に満ちた可能性の固まりである」と定義すれば、DNAに刻まれた先天的な能力も、後天的に習得する能力も、顕在化する前には単なる可能性にしか過ぎない。これらをどのように発現させ、活性化していくかが、教育の課題である。

また、人間の能力を一言で表すとすれば、様々な「生きる力」であるということもできよう。「生きる力」はどうすれば育っていくのか、いろいろのパターンがあるのだろうが、私は「教育とは驚きを与えることである」という考えを支持している。現代のように殺伐とした刺激の多い社会では、「驚く心」そのものも麻痺してきているのかもしれない。

しかし、作業的・体験的学習は体を動かして全身で感受・発想する学習形態である。とすれば、地理でも「地域調査」での作業的・体験的学習を生かして、生徒自らが「学び方を学ぶ自発的な学習」を展開し、地域的・空間的な認識能力や分析能力・総合力などを地理教育を通じて身につけていくことが出来ないかと考える。実施には纒々困難な状況もあるとはお聞きするものの、教員の方々にはその効果を信じて実現に努力されるよう熱望するものである。

【謝辞】

今回、岐阜県高等学校教育研究会地理部会の先生方と共に、この研究大会でお話ししたり、中山道の巡検に参加したりできたことは望外のことであった。お世話いただいた小山 徹部会長(岐阜県立華陽フロンティア高等学校校長)、吉田與一郎主務(大垣西高等学校教諭)、「地域調査」の研究授業をして戴いた木村 稔加納高等学校教諭、地域調査の会場校として種々のご配慮を戴いた阿部芳久加納高等学校校長をはじめとする加納高等学校の先生方、研究大会の会場をお手配戴いた服部 晃岐阜県教育委員会教育次長をはじめとする教育委員会の先生方、古地図などのご提供を戴いた松尾弘之助世界分布図センター室長をはじめとする先生方、種々のお話を賜った今井春昭岐阜地理学会副会長(中部学院大学教授)、巡検等様々にお世話になった川村謙二岐山高等学校教諭などの方々に厚く御礼申し上げます。

【注】

* 本稿は、平成15年10月3日に行われた岐阜県高等学校教育研究会地理部会・岐阜地理学会、平成15年度第2回研究大会での岐阜県総合教育センターにおける講演内容と、10月4日に行われた中山道巡検での岐阜市「ぱるるプラザ」における講演内容とを整理したものである。

【参考文献】

- ・文部省(1999)：『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』，336頁．
- ・田中啓爾(1928)：『中等 日本地理』，目黒書店，237頁．
- ・田中啓爾(1930)：『中等 日本地理資料』，目黒書店，175頁．
- ・田中啓爾(1937)：『中等 新地理概説 改訂版』，目黒書店，154頁．
- ・服部銈二郎(2003)：『浅草・上野物語 江戸・東京、原点のまちの物語』，古今書院，183頁